



BEST

Recyclers Alliance

NEWS

ベストリサイクルズアライアンスニュース

中古・リビルトパーツのご提供で
お客様との夢をつなぐ情報誌

2019.12

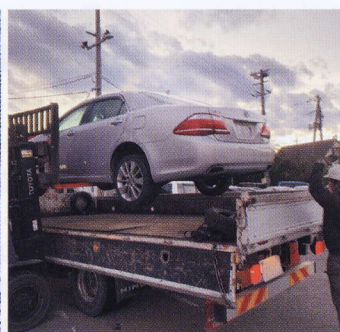
Vol.198

台風19号JARAグループ救援活動

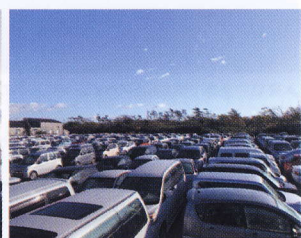
10月12日の台風19号に対し即刻救援活動 直撃を受けた福島、宮城両地域に駆け付ける



▲仙台市に設けられた被災車両集積のヤード



▲福島地区の救援活動の様様



▲福島地区の被災車両集積のヤード



▲宮城地区の救援活動の様様

台風19号が東北地方を襲ったのが10月12日。国内を襲った観測史上最大級の被害をもたらした台風だった。これを受け、(株)JARA(北島宗尚社長)・JARAグループ(土門志吉会長)ではさっそく救援活動を開始し、台風の中心が直撃した(株)キャレック(渡邊和寛社長)、(株)イマイ自動車(今井雄治社長)に向けてボランティアを急派し、被災車両の受け入れを展開、成果を挙げた。過去複数回、相互に救援活動を実施した経験もあって、今回も手際よい作業ぶりを各所で見せた。

(株)JARAではいわきに4000坪、宮城に5000坪のストックヤードを確保した。いわきでは、迅速な引き取り・処理を推進するために、JARAグループからボランティアを募り、(株)キャレックの引き取り補助やヤード管理等の業務を支援した。12社・20名が代わる代わる支援、北海道・岡山・和歌山・新潟等、全国各地から支援の手を差し伸べた。

また11月27日には、仙台市のメンバー7社が一堂に集結し、(株)イマイ自動車に対する引き取り支援を実施した。通常時もお互いに支援し

合っているが、11月27日のみは全事業者が集まり支援を同社に集中させ、強固な団結ぶりを見せた。

自動車リサイクル事業の最大の課題はこういった規模の大きい災害時には、被災車両の収集にあたるべき当事者が最大の被害を受けて動きが取れなくなってしまい、如何に周囲の同業者との連絡を取り合うかで問題が左右されるという点だ。

この点から見て、JARAグループとしては福島県いわき市の(株)キャレック、宮城県仙台市の(株)イマイ自動車両社の現状復帰がポイントで、関係者の意識はその点に集中し、円滑な連携プレーを展開した。

ボランティアを受け入れた(株)キャレックでは「東日本大震災を超える水害車が発生し、水害規模の大きさに驚いた。自社内で積載車の2名体制を敷くが、一時保管場所があつという間に満タンになり動きが取れなくなった。フォローに来ていただいて、ヤード管理と引き上げフォローをしていただけたことで、受け入れ解体台数は急増し多大な支援をいただきました。また現行のプリウス等は、水没してしまうと

4輪ロックが解除できず、車庫からの引き上げなどには、予想以上の時間を要しました。市当局にも、車両の一時保管場所について依頼をかけたが、住宅からでる被災ゴミの一時保管場所確保が優先され水没車両となると、まったくと言っていいほど手が回らなかったため救援はほんとうにありがたかった」(渡邊寛樹副社長)としていた。

(株)イマイ自動車では「被災者や引き上げに関わった業者にとって災害の車輛は復旧の妨げでしかなく、被災者から早く引き上げてほしいと依頼があつても、災害が広域であったため自社の能力だけでは日数がかかってしまい、お客様のご要望に応え切ることができていませんでした。グループの仲間の力を借りることで、早い引き取りを実現し、被災した方々の復旧に力を注ぐことができました。参加して下さったメンバーも、宮城の復興という大きい視点のボランティアに参加していただき、自社の利益よりも地域の為、弊社の為に尽力いただいたと感謝しております。グループの存在意義や絆を感じることができる、良い機会になりました」(今井雄治社長)としている。

長時間の討議に疲れ果てた各国代表 会期は過去最長だったが妥協的合意に止まる



▲小泉環境相が受賞した化石賞には若者の意見が反映している
(写真は国際環境経済研究所・竹内純子氏撮影)

▲妥協的合意で閉会したスペイン・マドリードのCOP25

国連気候変動枠組み条約締約国会議 (COP25) が12月15日、スペイン・マドリードで閉幕した。会期は過去最長となったが、妥協的な合意をまとめるにとどまった。スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリさんが参加して批判を展開、また日本から参加した小泉進次郎環境相が削減目標を明言しなかったことで国際環境NGOから不名誉な「化石賞」を受賞したことなどで注目された。

予想以上のロングランの会議に疲れ果てた各国代表団は、温室効果ガス削減への取り組みを強化することでようやく合意に達した。来

年イギリス・グラスゴーで開かれるCOP26までに、すべての国が新たな気候変動に対する取り組みを明らかにする必要がある。温室効果ガスの国際取引など、いくつかの問題が来年に持ち越しとなった。

会期を2日間延長した結果、参加国は来年の会議までに、温室効果ガス削減の新しい改善された計画を示すことで合意した。気候変動の危機を回避するため科学者が必要と唱えている対応と、現在の取り組みのギャップを明らかにすることが求められている。欧州連合 (EU) や小さな島国などは野心的な対応策

を支持したが、アメリカやブラジル、インド、中国など幅広い国々がこれに反対した。しかし、裕福な国々は気候変動に関する2020年以前の約束を守ったと示す必要があるとすることで、妥協がなされた。

石炭火力発電利用を継続すると表明した日本は会議の席上、各国から強い批判に晒されたが、これを受けて日本の経済界では脱炭素アクションプランを提示、CO2貯留推進や水素燃料への転換、あるいは脱炭素関連企業への投融資強化を検討する意向を示して国際的な批判を回避したいとしている。

(株) JARAのセミナー

11月28日、29日の両日 静岡県裾野市で フロント業務セミナー 開催し成果

(株) JARA (北島宗尚社長) は11月28日、29日の二日間、静岡県裾野市のあいおいニッセイ同和自動車研修所 (東富士センター) で好評のJARAオリジナルの「フロント業務セミナー・入門コース」を開催、フロントマン電話対応のレベルアップを目指した訓練を実施した。

初日はフロント業務、接客対応の心構え、フロントの役割、CS・カスタマーサービス、収益の考え方等についての座学を受けた。

二日目は電話対応の基本動作、そのロール



▲静岡県裾野市で開かれたフロント業務セミナー

プレイング、ディスカッション、録画による評論等を行い、最後に総括をまとめた。

とくに後半のロールプレイングでは各自の対応ぶりを再度ビデオ撮影した映像を参加者全員で確認、自らの動きや言葉使いを客観的に評価する部分が好評だった。

「最近では検査証の番号で導き出される部品が複数ある場合が多く、型通りの商談では特定することが難しく、一定の話法や部品情報が求められ、そういう突っ込んだ場面の訓練に効果があった」と主催者側では見ている。

(株) BWの地区会

12月14日、15日の両日 中四国九州地区研修会



▲福岡県博多市で開かれたBWグループの中四国九州地区会

(株) ビッグウェーブ (服部厚司社長) は12月14日、15日の両日に福岡県博多市で中国四国九州地区の研修会を、14日には同会場で同地区の代表者会議をそれぞれ開催した。

研修会には20名の各メンバー企業社員が、代表者会議には12名の代表者が参加した。

新しくSDGs (持続可能な開発目標)に取り組む
NPO・JARA副理事長郷古実氏に聞く

第12回アジア自動車環境 フォーラム熊本大会で アジア太平洋自動車 リサイクル協会・APARA発足



(株)JARA(北島宗尚社長)が後援する第12回アジア自動車環境フォーラムが熊本市で開催され、アジア太平洋自動車リサイクル協会・APARAが新しく結成された。と同時に2015年に国連サミットで提唱されたSDGs(持続可能な開発目標)の一環として自動車リサイクル事業を捉える姿勢を鮮明にした。この結果、日本の自動車リサイクル技術やノウハウは一気に世界の基軸に昇格し、次の場面の主役になった。その背景をNPO・JARA副理事長である郷古実日本自動車大学教授に聞いた。

今回の熊本でのアジア自動車環境フォーラムについての先生のご感想を伺いたい。

郷古 第12回アジア自動車環境フォーラムは所得の高まりを反映したアジアの経済圏としての台頭が始まっている今を捉えて、ここ日本の熊本で開かれたという点で、的を得た、そして時機を得たものとして高い評価を与えたいと思っています。テーマの設定や各国の発表も時流に合っていましたし、非常に参考になりました。今のアジアは日本の60年代当時と同じ傾向を見せている、これから加速度的に自動車事情が発展し始めると見えています。ちなみに発表されたモンゴルでの自動車環境事情は近未来のアジアの課題を良く表していて、現実にもどのように問題が表面化するかを教えてくれています。私は環境問題はその動きが企業による利益化が果たされるインフラビジネスとしての形を取っていかねばならない、そういう方向に向かわなければ具体的な問題は解決しないと見えています。すでに自動車リサイクル事業はある意味でインフラビジネス化が進展していると思っています。世界中で災害が多発していますが、その災害対策を進展させる意味で、事業自体がインフラビジネスとして

の体裁を整えていくべきだと考えています。その兆しが顕著になってきています。

環境フォーラムでの結果を現実の環境対策に結び付けるにはどうすればいいのでしょうか。

郷古 フォーラムをまとめられた東北大の劉教授、熊本大の外川教授らの手で発表された内容は学術資料として世間に公表されていきます。議事内容がアカデミックにまとめられていくと同時にこれらの研究成果がビジネスの材料として正確に分析されるべきです。但し、現状では自動運転化やCASEのテーマがどこまでビジネスの対象となるかは見通せてはいません。簡単に利益に繋がるテーマとは言えない部分も多くありますが、自動車を核としたすべてのテーマが社会インフラ産業の核になることは確かなことです。抽象的な環境問題を只絵に描いた餅のままにしておくのではなくて、地道にそれらの動きの中から具体的なビジネスに引き上げていく努力が必要ではないでしょうか。実際問題として自動車リサイクル業界ではそういう動きが現実のものとなって、水害で被災した車両の引き上げなど大きく社会貢献を果たしています。さらにこういったフォーラムの現場に多数のビジネスマンが参加されて熱心に聴講されているのを私も目の当たりに見ております。良い傾向ではないかと思えます。

SDGs(持続可能な開発目標)について説明してください。

郷古 これは2015年に国連サミットで傘下の193カ国で採択された世界目標で、貧困、飢餓、教育、健康、安全な水とトイレ、気候変動、海洋汚染、陸上の豊かさと言った17目標・169ターゲット・232指標を2016年から2030年までの15年間で達成しようというものです。いままで一個ずつばらばらに取り

組んできていたものを集約して思想的にまとめたものです。我々のテーマである自動車リサイクルもこの動き・SDGsの中に入るテーマとして捉えてともに前進して行こうということになりました。今回の熊本大会でそれを標榜したことになります。さきにも申し上げましたが、自動車リサイクルを軸とする環境対策を今後は発展途上国においてもソーシャルビジネスとして育て上げていくべきです。幸いアジア圏でもSDGsとして投資して企業化しようという機運は高まりを見せています。言葉だけではなく企業として利益を挙げながら持続可能な開発目標・SDGsに挑戦していく時が来ています。

先生が考える日本の自動車リサイクル業界に対するお考えを聞かせてください。

郷古 今回の環境フォーラムで画期的だったことは「アジア太平洋自動車リサイクル協会・APARA」という新しい組織を立ち上げて、自動車リサイクルのSDGsの推進に取り組む意向を表明したこと。世界の自動車リサイクルを概観しますと米国、欧州の二大市場に加えてアジアの市場をまとめるベースが出来上がったこと。ということはこのAPARAの中核に我々日本の自動車リサイクル業界が位置することになり、約300社の事業者がまとまる(株)JARAの果たす役割はいやおうなく大きいものになってきています。東南アジア、中近東、アフリカなどでのビジネスチャンスは拡大しつつありますから、我々が現在保有しているオンラインビジネスシステムや市場調査機能をフルに発揮することで、世界規模の自動車リサイクルの市場が大きく変化する時を迎えているように思います。そういう業界の自覚が芽生えて行けばほんとうにうれしいことではないでしょうか。

ビッグウェーブグループ

木山 純 氏

株式会社荒谷商会

商品化の仕上げ検品に 全力投入の新進気鋭



▲地元で根差すリサイクルの正統派の同社 ▲木山 純 検品担当

今回のビッグウェーブ会員は広島県呉市の(株)荒谷商会(和田孝美社長)。創業は1984年でグループ内ではしっかり足元は固めている。総社員40人、月間処理台数1000台、部品の在庫は10000点の規模。地域に根差した商いで業績を上げている。

◇若手の現場担当で品質維持

その同社の生産部門で検品作業を担当しているのが木山純氏(27歳)だ。同氏は地元の大学でバイオリサイクルを専攻した後、同社に入社、前処理、解体、オークション検品、梱包などを経験した後、生産の総仕上げにあたる検品の専任となり、現在に至っている。

「最終段階の検品作業でミスは許されません。毎日神経使っています」という。最近の傾向として小型の電気部品の量も増えており、付属するハーネス類や小さなビスなどが大雑把な扱いで抜け落ちると思わぬ不具合を招く商品も少なくない。最終の商品チェックは慎重に行わなければならないケースが増えている。

「部品本体は無傷でOKだとしても細かい付属品が一個欠けていても整備の現場では用を為しません。お客様のご迷惑は想像以上です。厳しい作業が続いています」ともいう。

荒谷商会は地域密着型の手堅い商いをモットーにしており、そのため商品の品質管理は徹底させてきた。そういう視点でいうならば木山氏の現場での思惑がそのまま顧客へのアプローチに繋がっていく。それだけ同氏の責任は重いものがある。

◇作動不能の部品は徹底排除

「リサイクル部品の商品特性ともいうべきですが、例えば部品の表面の小さな傷と付属品の欠品や作動の不具合を比較した場合、圧倒的に付属品の入れ忘れや作動の不具合のほうが傷の有無より重症です。部品の性格や持ち味を確かめながら検品作業をしなければなりません。一旦発送してしまうとミスを取り戻すことは非常に難しい。輸送中の事故も含めて油断はできません」と仕事の重要性を語る。連日の激務を癒すには休日の余暇を最近はやりのゲームで過ごす。今様のキーマンらしい横顔を見せている。

職場 広島県呉市苗代町445の1
TEL0823・30・5225

JARA会員

和田 まゆみ さん

有限会社エムケーインターナショナル

中販部門持つリサイクル部品販売 15000点の在庫量で健闘



▲中販と輸出に実績ある同社 ▲和田まゆみフロント担当

埼玉県川越市の(有)エムケーインターナショナル(伊藤征輝社長)は創業が平成12年の業界では新進気鋭。事業内容は中古車販売を軸に、自動車解体、リサイクル部品販売、自動車及び機械輸出など多岐に亘る。

自動車リサイクル部門は総員12人で月間の解体台数約40台。部品の在庫量は15000点を維持する。入念にきめ細かい部品取りを行い、できるだけ無駄のない生産を目指す。豊富な在庫量を生かして有利なリサイクルビジネスを展開中だ。

◇女性フロントを目下養成中

そんな同社のフロントにこのほど配属されたのが和田まゆみさん(44歳)だ。彼女は同社に入る以前に中古車輸出商社に4年間勤務した経験を持っている。エムケーインターナショナルから部品を購入していた取引先に勤めていたところを半年前にスカウトされた。

「ここに来るまでは自動車の外側だけを見て仕事をしていました。今は自動車の中身をじっくり見ながらのビジネスで毎日が興味津々です」という。入社間もないので、とりあえずデスクワークでフロントと梱包の一部を手伝う毎日だが、想いはもっと現場も勉強したいと熱気のことまった毎日を過ごしている。

◇将来は外周りも希望で部品情報吸収

「私は女性ですが好奇心が強いほうで、どういふふうのリサイクル部品が生産されていくのか、社内ではどういふ手順が求められているのかも、とても知りたい」という。

幸い彼女を取り巻く周囲はベテランの社員が多数固めており、立ち上がり直後の彼女をしっかりガードしている。連日の体験が猛スピードで彼女を強くしつつある。

「社内の流れを吸収したら、できればお客様のところに向いてどういふふうのリサイクル部品を使っておられるかも見てみたい」となかなかの気迫だ。

埼玉県はリサイクル部品販売の激戦区。今後は厳しさもあるが同時に拡販の余地も残されている。和田フロントの成長を待ちたい。

職場 埼玉県川越市上松原32の1
TEL049・238・7205

JARAグループ

谷口 陽彦 氏

茂田石油(株)・モダオート

GSと整備工場持つ大企業 部品在庫は2万点以上誇る



▲地元では大型の整備事業者の同社 ▲谷口陽彦フロント担当

北海道旭川市のモダオート(茂田真範社長)はガソリンスタンド36店舗に整備工場を併設する大規模事業者で同時に自動車リサイクル部品の生産販売にも取り組む特殊な事業者である。

グループの総社員数は400人を抱え、そのうちの40人がリサイクル部門に属している。

月間の処理台数は800台で部品の在庫点数は22000点の規模を誇っている。

◇現場上がりのベテランをフロントに

その同社のフロントに着任して半年目を迎えるのが谷口陽彦氏(36歳)だ。同氏は入社10年目を迎えて、半年前までは現場の解体作業7年間、形状検査1年間、登録業務1年間を経験して現在に至っている。同社に来る前にも4年間同業で国内部品生産を経験しており、生産現場の感覚は筋金入りのベテランだが、「いままで機械相手の仕事が続いていましたのでお客様とのやり取りはこれから勉強です」と謙遜する。

しかし、これまでの現場での作業経験は十分に持っていることから、今後の顧客対応に必要な情報にまったく不足はない。時間の経過とともに人間関係は深まる算が強い。「ようやく電話の対応に慣れてきたところですが、やはりビジネスの基本は信頼関係の度合いで決まります。お客様との関係強化を意識した対応を心掛けている最中です」という。

◇豊富な自動車情報駆使した部品営業

モダオートは先にも見たようにリサイクル事業の周囲をガソリンスタンドと整備工場の経営でぐるりと取り囲んだ形になっており、リサイクル部品顧客の作業現場の情報を社内豊富に手にすることができる環境だ。

結果として生産の実態を熟知した谷口氏が同社の看板を背負った実力フロントとして動き出す時期は間近い。「今はお客様との最初のやり取りを傷つけないよう細心の注意を払って関係作りに専念しています」としている。

フロントに着任して間もない今、連日気を張る時間が過ぎていく。休日にサウナに通うのが唯一の楽しみという仕事一筋の谷口さんだ。

職場 旭川市住吉4条2丁目8の13
TEL0166・58・8123

